

3 令和4年度の活動評価と課題

(1) 図書館利用

令和4年度においても新型コロナウイルス感染症が完全には終息することがなかったものの「with コロナ」の定着から日常生活の様々な制限についても少しずつ変化が見られた一年であった。図書館利用においては、マスクの着用や手指消毒、手洗いの推奨、一定間隔をあけた閲覧席の利用等は継続したが、おはなし会は人数の制限や会場の変更、感染症対策を徹底しながら、定期的に行えるようになった。利用統計の数値としては、令和3年度と比べると全体的に減少したものの、コロナ禍前より増加しているものもあった。

個人貸出の冊数は628万冊となり、令和3年度から37万冊の減少となった。また貸出人数についても3年度から10万人減の274万人となった。登録人数は一定期間利用のない登録を整理したため、1万人減の37万3千人となったが、その内、令和4年度に1回以上貸出等を行った利用者人数は15万2千人と令和3年度とほとんど変化はなかった。

次に予約受付件数については196万件となり、はじめて200万件を超えた昨年度の数値には及ばなかったが、コロナ禍前の令和元年度と比べても6万7千件増加している。これにより予約・回送冊数も271万点と、昨年度よりは減少したものの、コロナ禍前よりは3%増加している。4年度においても引き続き市立図書館全蔵書数の約1.4倍の資料が各館を巡っていることとなり、資料が有効かつ効率的に利用されている状況を示している。

なお、団体貸出については昨年度よりも増加し、213団体に、28,269冊の貸出を行った。コロナ禍前の数値には戻っていないが、各館において団体利用は増えている傾向である。

これらの統計推移等から類推すると、令和4年度においても市民の読書意欲は高いものの、外出機会や外出時間の減少、縮減など「with コロナ」の意識が進む中で利用者一人ひとりの図書館利用に対する意識や読書への変化も感じられる。来館時間の短縮や人との接触を少なくする予約サービスの利用、ベンチや閲覧席でのソーシャルディスタンスの定着だけではなく、電子書籍の普及等による紙の本からデジタル機器を活用した読書が一般化されつつある状況など、これからのアフターコロナにおける図書館サービスについても再考が求められてくるように思われる。

(2) 市民への情報・資料等の提供

市立図書館のホームページの利用は、トップページのアクセス件数は、コロナ休館等がなくなり通常開館に戻ったこともあり、開館情報等の確認が減少したことが考えられ前年度より47万件減の750万件となったが、1日平均では2万件を超えるアクセスがある。利用状況の確認やおはなし会などのイベント開催情報など、それぞれの図書館利用に応じたホームページの活用は定着しているものと思われる。

市民の情報取得のツールとして、ますますホームページからの情報提供は重要となっている。図書館からのお知らせ等、図書館情報の周知にはホームページの活用は欠かせないものであり、令和5年度整備の次期図書館コンピュータシステムの更新においては、市民がより見やすく、使いやすい図書館ホームページの構築を進めている。

また、令和3年度に試行実施された「有料宅配サービス」は令和4年度からは本格実施とした。市民がホームページ等で予約した資料を送料着払いにより自宅で受取れる便利さから、在宅勤務者や子育て世代の利用も多く、4年度は延べ532人の登録、宅配貸出771冊の利用があった。今後も様々な生活様式に対応した利用が見込まれる。

次に、市民と情報・資料をつなげるため、各館で実施している特集コーナーなどの展示についても、市民生活における調べものや調査研究的な用途・ニーズに対応できる図書館の特性を生かした企画がより重要となっている。個人の読書だけでなく、市民や地域の課題解決に役立つという役割が求められ、それに見合った対応のできる図書館職員のますますの資質向上が求められている。

さらに、電子書籍サービスの試行実施として、令和5年3月21日から国の交付金を活用し、「かわさき電子図書館」のサービスを開始した。電子書籍を5,000点導入し、365日24時間、市内在住、在勤、在学の利用者が利用できるようになった。

(3) ICT化・デジタル化によるサービスの向上と

図書館運営の効率化

川崎市立図書館ではICT推進を重要施策の一つとして取り組んでおり、中原図書館の新館整備に合わせて10台の自動貸出機や無断持ち出し防止装置(BDS)、自動書庫、自動予約棚等を整備するとともに、地区図書館全館にも自動貸出機、BDSを導入してICTを活用した図書館サービスの向上を推進している。

特に非接触による貸出の需要は継続して高く、自動貸出機については、自動予約棚のある中原図書館では利用率が85%に近づいているほか、川崎図書館においては

40%近くの利用がある。その他 30%を超える館もあり、自動貸出機の利用は一定程度、認知されている。今後も利用率の少ない館を中心に利用を呼び掛けていく。

また、さらなるサービスの向上として、全館においてインターネット接続ができるように「かわさき Wi-Fi」を整備し、パソコンやスマートフォン等での検索や情報収集などの利用ができるようにした。

今後の ICT 化の推進として、次期コンピュータシステム更新に合わせて、交通系 IC カードや図書館アプリによるスマートフォンを活用して図書館資料の貸出ができるようにするなど、図書館利用の利便性の向上や効率化を目指し、多様化する図書館サービスの充実を図っていく。

図書館資料のデジタルアーカイブ化などにも取り組んでおり、郷土・行政関係資料を中心に一部の資料についてはホームページに掲載し広く利用に供している。今後、市制 100 周年記念事業に向けて関連する資料のデジタル化などを推進していく。

(4) 「読書のまち・かわさき」の積極的な展開

令和 4 年度も、「読書のまち・かわさき」への取り組みとして、市立小中学校、大学、議会図書室、川崎フロンターレ、区役所、県立川崎図書館等との連携業務、図書のリユース、各種市民団体・機関等との連携等を広範かつ積極的に展開しながら、新たに策定された「第 4 次読書のまち・かわさき子ども読書活動推進計画」に基づく取組を推進した。

さらに、市立小中学校との連携については、小中学校全校及び特別支援学校図書館が図書館総合システムにより運用されているほか、授業支援（関係資料の収集・提供）、調べもの学習、図書館見学、職業体験等の受入にも取り組んできた。また学校から要望の多いテーマに沿った資料をあらかじめ選書し、テーマごとにセットにした「授業支援図書セット」の学校への団体貸出にも対応できるようにしてきたところである。

4 年度は、コロナが落ち着いてきたことから、定期的な「おはなし会」や各種イベントなどの読書普及活動を徐々に通常に戻すことができた。また各区の学社連携会議も一部の区では対面で開催するなど、コロナ以後の学校との連携について協議を進めることができた。特に、総括学校司書やボランティア研修への協力、区内学校図書館への市立図書館の参画、連携強化など、これからも学校との協働を深めていかなければならない。

次に、川崎フロンターレとの連携事業である「川崎フ

ロンターレと本を読もう！」は、4 年度においても関係団体、関係部署と協力して事業を推進した。読書啓発リーフレット『キックオフ！“読書のまち かわさき” vol. 14 特製しおりの発行・配布のほか、各館でも連携コーナーの設置などを継続した。さらに、「フロンターレ選手と本を楽しもう！」は、3 年ぶりに武蔵小杉の商業施設グランツリーにおいて 2 人の選手が参加して実施することができた。選手が直接参加者に読み聞かせを行い、質問やクイズなど、川崎フロンターレと図書館による読書普及の連携事業を積極的に展開することができた。

他都市との利用協定については、現在、稲城市、狛江市、町田市、横浜市の 4 市と締結しているが、平成 29 年に協定を締結した横浜市の川崎市民の利用は、令和 4 年度までに 4,305 人の市民が横浜市立図書館に登録し、約 2 万 2 千冊の貸出利用の実績があった（横浜市調べ）。今後、川崎市立図書館における横浜市民の利用状況などにも注視しつつ、利用協定自治体との円滑な連携を推進していく。

なお大学図書館との利用協定については、和光大学は令和 4 年 12 月から市民利用が再開されたが、コロナの影響により明治大学、専修大学においては 4 年度も市民の利用はできない状況が続いた。（令和 5 年 6 月から再開）

(5) 施設整備等

各図書館の長寿命化対策は計画的に進めているが、令和 4 年度においては、高津図書館の給排水・防水工事や麻生図書館のトイレ改修など各館において必要な整備を進めた。

また、カウンター等の飛沫防止シートの設置や閲覧席、ベンチでのソーシャルディスタンス、返却ポストの利用拡大など、コロナ禍における感染防止対策を各館の実情に合わせて実施してきたが、令和 5 年 3 月からは、「with コロナ」に合わせ、各館の閲覧席やベンチの数を元に戻すなどの対応を行った。

さらに小田急線栗平駅に新たな「返却ボックス」を設置し、図書館から離れた地域における図書返却の利便性向上に努めた。

(6) その他

・図書館資料の収集については、引き続き中原図書館で集中選定を実施した。資料購入や市全体での複本冊数の調整などを行い、限られた予算の中でタイトル数の確保

など効率的な執行に努めた。

・令和4年度地域資料企画展示として「川崎市 政令指定都市誕生50年」を各館で開催した。50年前の様子や社会の変化が分かる展示を行った。

・令和4年8月に策定された「市民館・図書館の管理運営の考え方」に基づき、指定管理者制度等、効率的、効果的なサービス手法の導入が示された。

・令和4年10月7日、読み聞かせボランティアスキルアップ講座として、絵本作家の「聞かせ屋。けいたろう」さんによる講座を中原図書館で開催した。

・令和5年1月27日に児童文学作家 いたうみくさんをお招きして「読書普及講演会」を開催した。

4 令和5年度の活動目標

市立図書館においては、平成20年度から「川崎市立図書館の運営理念と活動目標」を基本に運営を行ってきたが、さらに令和3年3月、今日的な課題や新たな生活様式等の変化に的確に対応していくために、「今後の市民館・図書館のあり方」が策定された。

「あり方」では、「市民にとって役立つ、地域の中で頼れる【知と情報の拠点】をめざして」を基本理念に

- ・行きたくなる図書館
- ・まちに飛び出す図書館
- ・地域の“チカラ”を育む図書館

の3つの方向性を基本的な運営の考え方とした。

さらに次3つの基本方針、

- (1)一人ひとりの市民が使いやすいしくみづくり
- (2)多様利用ニーズに対応した読書支援
- (3)地域や市民に役立つ図書館づくり

に沿って、「運営理念と活動目標」と共に図書館活動の基本方針として取り組んでいくこととした。

またこれらの基本方針等を踏まえて開発を進めた新図書館コンピュータシステムについては、令和5年10月の稼働に向けて整備等のスケジュール管理を適切に実施する。

令和4年3月に策定された「第4次読書のまち・かわさき子ども読書活動推進計画」に基づき、今後も様々な子どもの読書活動に取り組み、関係団体、関係部局等との連携により一層の推進を図る。

令和5年3月から「かわさき電子図書館」のサービスを開始したが、今後の電子書籍の活用について「読み放題パック」の導入などによる学校との連携や利用者アンケート等を通じて、本格実施に向けた検証、取り組みを行う。また令和6年度の市制100周年記念事業に向け、市民館等との連携により事業を推進する。

今年度も基本的な感染症対策に留意しながら、様々な図書館活動を積極的に展開していく。



川崎市立図書館
イメージキャラクター つばきちゃん

5 令和4年度川崎市立図書館統計

(1) 令和4年度図書館費決算見込

(単位:千円)

	総額	図書整備		閲覧奉仕	運営管理	自動車文庫	館内外改修工事	コンピュータ管理IT化推進	閲覧所整備	カウンター・巡回車等業務委託
		うち資料費								
図書館費合計										
令和4年度	855,739	101,885	86,291	39,516	174,749	4,228	7,266	259,427	36,361	232,307
川崎図書館	52,958	4,057	4,026	332	48,569					
大師分館	5,042	2,315	2,315	2,727						
田島分館	5,104	2,266	2,266	2,838						
幸図書館	3,322	2,978	2,978	39	305					
日吉分館	5,157	2,247	2,247	2,910						
中原図書館	682,300	68,223	52,726	20,018	95,059		7,266	259,427		232,307
高津図書館	22,281	3,013	3,013	193	19,075					
橘分館	4,886	2,307	2,307	2,579						
宮前図書館	10,450	3,835	3,835	2,246	141	4,228				
多摩図書館	43,512	5,304	5,238	1,506	341				36,361	
麻生図書館	5,404	3,085	3,085	2,058	261					
柿生分館	15,323	2,255	2,255	2,070	10,998					